

【最優秀賞】

旅先で考える幼なじみとの日々

藤井 大輝（東京都 暁星中学校 3年生）

「着いた〜」
二人で無人駅の待合室に入る。中は蒸されるように暑く、虫たちが飛び回っている。

中学校に入ってからこの数年間、よく旅行に行かせてもらっている。小学生のころから電車が好きだったけど、宇宙やLEGOにも興味があって、一週間くらいは鉄道のことを考えないこともあったと思う。それも当然、普段は月に何回か踏切を通るときに「あの電車はどこへ行くんだろう？」なんて考えるくらいで、家のすぐ近くを走っている西武線にだって年に数えるほどしか乗らなかつた。特に鉄道マニアだった祖父が亡くなってからは、「もう電車好きの時代は終わったよね〜」的なクラスの空気も相まって「あの電車乗ってみたい!」とか思わなくなっていた。そんな僕がなぜ青森の無人駅に来ているのか、その理由はもとをたどれば一人の幼なじみにある。

ヒロキとは、物心ついたころから同じアパートに住んでいた。

当時は建物全体が父の会社の社宅ということになっていて、みんなが知り合いだったから、自転車も一緒に練習したし、夏になればザリガニ取りだってした。

五年生の初めのことだった。ヒロキが受験のために塾に行っていると聞いていた母は、僕に公立の中学校は合っていないのではと考えてくれていたらしく、僕に彼が通っていた塾の体験授業を受けさせてくれた。みんなが楽しく勉強をしているところを見て、僕もここに通いたいと思ひ、いつしか彼と同じ学校を目指すようになった。しかし、僕の受験は失敗、彼とは違う私立中学校に入った。

「センパイ、電車いつ来るんですか」

「やばっあと五分じゃん!」

慌てて書いていた駅ノートを仕上げ、重たいカメラを手に駆け出した。

「急いで!」

走りながら叫ぶ。

「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

とっさに振り返ってとっさにカメラを構える。そう、この旅の目的は撮り鉄なのだ。今日は鉄道研究部のみんなで来た旅行の四日目。中一の後輩と一緒に行動している。

「すぐ来ちゃったから撮れませんでした」

撮れた写真を見てると話しかけられた。そういうえば僕も中一の時なら今のは撮れなかつただろうなと思った。そこはよく撮影に行かせてもらっている成果かもしれない。少し編集すれば結構いい写真になる気がした。

「次来る電車撮ったらバス乗って深浦行くよ」

「深浦ってどこでしたっけ?」

昨日も行った駅だがもう忘れてしまったのだろうかと思いつつ、「昨日この駅から一つ南の駅まで歩いたでしょ。あれが深浦だよ。」

「先輩ってなんでそんなに駅名覚えてるんですか?」
深浦くらいは覚えて普通だと思うが、何回も来てるからねとごまかした。

五能線に来るのはこれで四回目だが、そういえばあまり南のほうは乗ったことがない。明日帰るときに乗ることになっているから、それで乗りつぶしができることになる。

そんなことを考えていたら「乗りつぶし」という言葉がやけに響いた。最後に行ったのはいつだろうか。たぶん冬に京王線に行ったきりではないか。だんだん思い出してきた。あの時はヒロキと小学校の友達二人と一緒に高尾山にも登った。寒かったから自販機でコーンポタージュを買って飲んだ気がする。あれからもう半年以上ヒロキと会っていないことになる。毎年近所の花火大会で必ず会うが今年は僕がこうして出かけているから、会うことはできないだろう。

夏休みが始まってすぐ、ヒロキを遊びに行かないか誘った時も、ヒロキが旅行に行くとかで会えなかった。さらに、僕も彼も自宅から引越してしまい、物理的な距離も加わった。

「センパイ、そろそろ電車来るんじゃないですか?」
「そうだね」

不意にさみしくなった。ヒロキと遊びに行った日も、そのうち過去のものになって、僕らは赤の他人としてこれから生きていくことになるかもしれない、と思ったからなのだろう。カメラをセツトしながら、僕は近いうちに必ず彼に会おうと心に決めた。